

乳幼児の言葉の育ちに関する現状と課題 (2)

—家庭と保育の場における「おはなし」の環境から—

小山祥子

Children's Language Growth & Development (2) : The Effects of Storytelling in a Family and Preschool Environment

Shoko KOYAMA

子どもの言葉を育む活動の一つである「おはなし」について、実際の保育現場と家庭における環境の双方からその現状を検証した。

その結果、保育の環境においては、先の研究で明らかになった結果と同様の傾向が見られたことに加え、「おはなし」の選択が計画的というよりも個々の保育者の趣向によって実践される場合が多く、保育所と幼稚園とでは、実施される時間帯が異なることからその意義に違いがあることが考察された。素話については、その有益性を認める保育者が多いにもかかわらず、その実施率は低かった。一方、家庭においては、絵本に触れる量や時間について、子どもにとって概ね恵まれている環境であることが結果に表れていたが、語り継ぐ昔話のような素話は、家庭においてはほとんど行われていない現状が明らかになった。

今後、保育現場においては、多様な分野と手法にわたる「おはなし」が実践されるよう保育者の技術習得、計画的な実践が求められ、家庭に対しては保護者への啓蒙が必要となることが考えられた。

キーワード：環境、保育、家庭、言葉、おはなし、昔話

1. はじめに

本研究テーマの第1報¹⁾においては、近年の若者の言語力低下の実態を社会調査や事案から問題提起し、乳幼児期の言葉の獲得の重要性をあらためて確認した上で、保育現場で実践されている領域「言葉」に関する活動内容を保育学生の実習日誌の記録分析から、現状の一端を検証した。その結果、子どもの言葉を豊かに育む活動の一つとして行われている絵本や紙芝居などの視聴覚教材を使用した「おはなし」²⁾活動は、ほとんどの保育現場で用いられているが、その内容にはいくつか危惧される課題があることが明らかになった。すなわち、保育者の選択に委ねられる話の題材は創作系に偏り、昔話や民話など日本文化を伝承する題材は極端に少なくなっていることに加えて、素話の手段はほとんど使われず、

一日一度も「おはなし」の時間がないクラスもあることから、保育者によって保育内容「言葉」の実践内容に偏りがあるという課題である。保育は、小学校以降の教科科目としての学習とは異なり、「さまざまな経験」という曖昧な指標により、実際には保育の受け手である子どもの経験に偏りをもたらす心配がある。

一方、平成21年4月から施行されている幼稚園教育要領、保育所保育指針の領域「言葉」では、内容の11項目目に『絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう』が規定され、その解説には、『視覚に頼らず、自分の心の中に自由にイメージを膨らませていくことができるよう、語りや読み聞かせを取り入れることが大切で、す³⁾』と新たな取り組みへの視点が強調されている。

「おはなし」は、視聴覚教材を使ったものと、話そのものを聞かせるタイプのものがある。前者には、絵本・紙芝居・パネルシアターやペープサート・指人形等を用いた「おはなし」であり、後者は、素話（口演童話・口演文学）やストーリーテリングといわれるように物を用いず、語り手の声による「おはなし」がある。どちらも、語り聞かせるのは子どもにとって保育者や保護者などの身近な大人である場合が多いことから、子どもにかかわる大人が「おはなし」をどのように捉えているのかを知ることが、子どもの「おはなし」環境の現状の一端を知ることにつながる。そこから課題を見出すことは、先の研究で明らかになった保育現場における「おはなし」の偏りについて、何らかの示唆や改善策が得られるものと考えられる。

そこで、本研究では、子どもを取り巻く「おはなし」の環境を、子どもの生活の場である「保育」と「家庭」のそれぞれの場にかかわる保育者と保護者の認識から、まずその現状と課題を明らかにしてみたい。

2. 研究方法

1) 現保育者（保育士と幼稚園教諭）に対し、「おはなし」活動の実態と認識について質問紙による調査を実施した。

【調査対象】 3・4・5歳児担任の保育所6園の保育士50名、幼稚園4園の教諭51名、合計101名。直接依頼方式のため回収率100%。保育経験年数は2～32年、平均経験年数は10.8年である。

【調査時期】 平成22年12月～平成23年9月。

2) 幼児をもつ保護者に対し、家庭における「おはなし」活動の実態と認識について質問紙による調査を実施した。

【調査対象】 3・4・5歳児をもつ保護者192名に依頼、回収数157（母親154名・父親3名）、回収率81.8%。内訳は、

3歳児（男児26名・女児27名）の保護者53名
4歳児（男児23名・女児26名）の保護者49名
5歳児（男児26名・女児29名）の保護者55名である。

【調査時期】 平成23年12月。

3. 研究結果

1) 「保育」における「おはなし」活動の現状と保

育者の認識

【質問内容】

①「おはなし」をする手段として、あなたがよく用いるものは次のうちどれですか？

【表1】保育所保育士の回答（単位：%）

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	計
絵本	68	22	8	1	0	0	0	99
紙芝居	20	60	14	3	0	0	0	97
読み聞かせ本	10	14	40	12	2	0	0	78
素話	2	4	22	17	8	3	0	56
PS*使用	0	0	16	12	21	3	1	53
CD使用	0	0	0	2	10	14	2	28
DVD使用	0	0	0	0	0	4	11	15
指人形使用	0	0	0	2	0	1	0	3
無回答	0	0	0	1	9	24	36	

* PS：ペープサート、パネルシアター

【表2】幼稚園教諭の回答（単位：%）

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	計
絵本	84	13	1	0	0	0	0	99
紙芝居	13	48	4	1	1	0	0	67
読み聞かせ本	3	23	9	5	2	2	0	44
素話	0	13	7	11	6	2	2	41
PS*使用	0	3	6	3	7	1	0	20
CD使用	0	0	1	3	1	6	1	12
DVD使用	0	0	2	6	5	1	4	18
指人形使用	0	0	1	0	9	19	24	53
無回答	0	0	0	0	0	0	0	

* PS：ペープサート、パネルシアター

保育者として、圧倒的に絵本や紙芝居を使用していることは数値上からも明らかである。一方、保育所と幼稚園の違いを見てみると、幼稚園教諭は紙芝居よりも絵本を使用する保育者が多く、素話は保育所保育士の方が数値は高い。

②それは何故ですか？（問①で1位を選んだ理由）

【表3】保→保育士の回答、幼→幼稚園教諭の回答

（単位：%）

	理由	保	幼
	いつでも手軽にできるから	42	23
	自分が好きだから（得意だから）	26	19
	子どもが好んでいるから（リクエスト）	18	19
	指導計画に組み込まれているから	4	10
	その他（自由記述回答）	6	29
	無回答	4	0

その他（自由記述回答）には、以下の理由があげられた。

a. 絵本を1位に選択した回答者（要旨）

【表4】

・絵本にはいろいろなものがあり子どもに触れさせたいから
・絵本の魅力を子どもに伝えたいから
・園の教育方針だから
・園に絵本タイムがあり、子どもの育ちに必要だから
・ねらいを伝えやすく、年長はあとで自分で読めるから
・子どものその時の成長や出来事にあてはまるテーマが多い
・発達年齢にあったものを選べるから
・絵本のお話は、次の活動へつなげやすいから（導入として）

b. 紙芝居を1位に選択した回答者（要旨）

【表5】

・30人クラスでは絵本は小さく紙芝居のほうが適切だから
・季節的、行事的なもののテーマが多く導入しやすいから
・視覚でとらえることができるから

このように、何を選択するかについては保育者の趣向が大きく関与していることがわかる。指導計画に基づく選択は保育所よりも幼稚園で若干高いが、それでも1割である。自由記述の回答からは、いかに保育において絵本や紙芝居が直接的、あるいは間接的にも情緒伝達や情報伝達によく使用されているかがわかる。

③多用している「おはなし」の分野は次のどれですか？（3つまで選択可）

【表6】 (単位:%)

	創作 童話	世界 昔話	日本 昔話	躰や 生活	自然 分野	キャラ ク -もの	その 他
全体	90	70	81	25	28	2	2
保士	88	80	94	16	18	2	2
幼教	93	55	61	39	45	3	3

このように、創作系の話を選択している割合が9割前後と圧倒的であった結果は、第1報と同じである。しかし、昔話や民話については、使用認識としては高いことがわかる。実際の絵本の量的観点に立てば、昔話や民話などの伝承系の題材は増えることはないので、毎年発刊される創作系に傾くことは自然なことである。また、保育所保育士と幼稚園教諭では、「躰や生活分野」と「自然分野」に違いが見られる。この数値の差には、「保育」と「教育」の違いが表れている。つまり、躰や生活は保育時間の長い保育所では、「おはなし」を通さずとも自然に生活の中で身につけていけるが、幼稚園

園ではあえて題材として取り上げて子どもの関心を向ける必要がある。また、自然分野は、絵本から自然科学の知識を子どもに学ばせるというねらいが、教育の場としての幼稚園に垣間見える。

④いつ、おはなしをしますか？（2つまで選択可）

【表7】 (単位:%)

	保育士	幼稚園教諭
朝の集まり時	14	26
午前の課題活動前	6	13
午前の課題活動後	6	13
昼食前	24	16
昼食後	6	24
午睡前	78	0
午睡後	10	0
降園前	40	97
その他(*)	10	3

この結果によれば、保育所では午睡前に、幼稚園では降園前に「おはなし」をしやすい環境にあることがわかる。一日の生活全体から見ると、保育所では昼食前後に、幼稚園では朝と帰りの時間に「おはなし」の時間が設けられ、取り組み時間に特徴が見られた。

⑤映像（DVD/VHS）を使った「おはなし」はいつしますか？

【表8】 (単位:%)

	保育士	幼稚園教諭
朝の集まり時	4	0
午前の課題活動前	0	16
午前の課題活動後	0	13
昼食前	0	10
昼食後	2	0
午睡前	0	0
午睡後	0	0
降園前	0	0
その他(*)	10	13
使用していない	54	35
無回答	30	16

(*) その他は、誕生会などの行事、学年の集まり、遠足の車中、年数回の特別な時、という回答であった。

一般的に保育時間の長い保育所のほうがDVDなどの映像を使用するケースが多いと考えられるが、保育所のほうが使用していない数値が高かった。また双方ともに、特別な行事等に使用するケースが多いことがわかる。

⑥素話をあまりしない理由は何ですか？

【表9】 (単位:%)

	保育士	幼教論
素話よりやらなければならないことがあるため	6	0
素話は専門家をお願いしたほうがよいと思うから	0	0
素話の方法を学んだことがなく、やり方がわからない	28	7
素話は養成校で学んだが、あまり使ったことがない	8	13
素話の魅力は理解している時間があればやってみたい	74	68
素話に興味はない	0	0
無回答	8	13

⑦その他「おはなし」について自由意見(要旨)

*下線は筆者が付記

- ・ちょっとした短い話でも素話になります。子どもたちの想像する力の大きさを素話によって感じています。(幼稚園教諭2年経験)
- ・その日起こった良いこと、悪いことを別の子どもの名前にした創作話を午睡前に話している。(保育士3年経験)
- ・素話は、人の話を聞くことに慣れる一つの手段だが、どのように行うのかわからず、やったことはない。(保育士3年経験)
- ・素話は正直一度も子どもたちの前でやった事がないため自信ないが、少しずつ取り入れていこうと考えている。絵本も紙芝居も園内に少なく、私費となっているのが現状で予算アップを切に願っています。(保育士3年経験)
- ・素話の魅力を現場の職員も学生に伝えたい。きらきらした目でぐっと話に聞き入る子どもの瞳は美しい。それを見て「またやろう」とネタ探しが楽しくなる。(保育士7年経験)
- ・素話は「話を聴く」「情緒や感情」を育てるのに効果があると思う。若い先生は素話を見聞きする経験がないので、専門家の語りを知る経験があると良いと思う。(幼稚園教諭21年経験)
- ・素話は、午睡の時などによく行っているが、子どもたちは喜んでいる。日常の出来事を織り込んだ話などもとても楽しみに聞いている。素話を聞くことによって、子どもたち自身も自分でお話を考えて小さい子に聞かせ、子どもたちに豊かな想像力が育っていると感じる。(保育士29年経験)

・話を聞けない子どもが増えてきている。話の聞ける子に育てるために、読み聞かせは大切だ。保育者自身がお話を楽しみ、子どもにたくさん与えていってほしい。(映像、音声機器ではなく、生の声で！)(保育士29年経験)

⑥と⑦の結果からは、素話の実施率に反して、その効果や魅力は認識されていることがわかる。実施されにくいのは、そのための準備が必要であることや、養成段階で教わったことがないというためであることも一因としてあげられる。しかし、日常的に身近なことで話を作って即興的に聞かせる保育者もいる。どちらにしても何も見ないで聞かせる話は、子どもを惹きつけ、想像力や集中力、また言葉への関心につながることを体感している保育者もいることがわかる。

2)「家庭」における「おはなし」活動の現状と保護者の認識

【質問内容】

- ①あなたのお子さんの絵本に関する環境について教えてください
- ア.図書館に通っている【39%】
 - イ.園の貸し出し絵本を利用している【30%】
 - ウ.月刊絵本をとっている【53%】
 - エ.自宅に絵本は何冊くらいありますか
【平均54冊：3歳児平均37冊、4歳児平均57冊、5歳児平均69冊】

調査対象者すべての家に冊数の差はあっても、絵本はあり、子どもが絵本を手取る物的な環境は整っている。また、図書館利用や月刊購読など目的意識をもって子どもに絵本と触れ合う機会をつくっている保護者も3割から5割いることを示している。

- ②家でお子さんから「絵本を読んで」と言われることはありますか？

【表10】 (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
毎日のようにある	34	37	35	35.0

ときどきある	60	51	42	51.0
あまりない	6	10	22	13.0
まったくない	0	2	2	1.3

③そのような時、どのように対応していますか？

【表 11】(複数回答) (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
すぐに対応する	56	51	56	54.3
あとで対応する	29	22	27	26.0
他の家族に対応してもら	6	8	6	6.7
その他	17	22	16	18.3

④「絵本を読んで」というとき、どのような理由のときが多いですか？

【表 12】 (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
純粋に絵本を読んでもらいたい	77	63	58	66.0
甘えたい	15	18	20	17.7
他にすることがない	0	6	6	0
いつもの習慣	19	27	27	24.3
その他	6	4	2	4.0

⑤お子さんにどのくらいの頻度で絵本を読みますか？

【表 13】 (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
毎日	21	33	31	28.3
週に数回	54	39	38	43.7
あまりしない	23	29	31	27.7
まったくしない	2	0	0	0.7

②～⑤は、絵本は家庭に置いてあっても、それをどれくらい子どもが触れているのか、また本来、絵本は大人が子どもに読み聞かせるものであるが、その観点からの質問の結果である。それによると、ほとんどの子どもは、家でも絵本を「読んでもらいたい」ために親に要求する姿を見せ、保護者側も応答にはさまざまな姿があるが、結果的には何らかの形でその要求に応じている姿が数値に示されている。毎日、親が決まった時間に読むという場合も3割前後見られる一方、あまり読み聞かせをしない保護者も3割前後いることがわかった。

⑥お子さんにどのくらい昔話を聞かせていますか？

【表 14】 (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
毎日	0	2	4	2.0
週に数回	23	27	18	22.7
あまりしない	75	60	62	65.7
まったくしない	2	12	16	10.0

⑦あなたのお子さんはどのような手段で昔話を知っていますか？

【表 15】 (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
園の先生から	56	47	47	50
親・兄・姉から	14	10	15	13
祖父母から	8	6	2	5
絵本から	40	39	56	45
TV・DVD等映像から	10	16	7	11

⑧昔話は、お子さんの育ちに必要だと思いますか？

【表 16】 (単位:%)

	3歳児	4歳児	5歳児	平均
a. 思う	77	84	80	80.3
b. 思わない	0	0	0	0
c. どちらともいえない	23	16	18	19.0
無回答	0	0	2	

⑨それはなぜですか？

a.「そう思う」の理由【125名の回答集約・複数回答】

【表 17】 (単位:名)

物事の善悪や道徳心を養う	35
教訓として学ぶことがある	23
日本の伝統文化風習を知ることができる	23
情緒や感性が豊かになる	14
暮らしに役立つ知恵や礼儀を知る	12
日本語(昔の言い回し、方言)に触れられる	12
日本人の精神、価値観、倫理観を知るため	10
知識として知っていることが大切、みんな知っているから、知らないと恥だから	9
代々受け継がれているものだから	7
想像力が豊かになるから	5
講習会で大切だと聞いたから	3
何らかのメッセージがあるから	1

c.「どちらともいえない」の理由【30名の回答集約】

【表 18】 (単位:名)

残酷すぎる、非情な場面があるから	3
他の物語(絵本)でも代用できるから	3
ハッピーエンドでないものが多いから	2
言葉や生活習慣など説明してもわからないから	2
ただなんとなく	2

子どもが自らであっていきほうがよい	1
子どもが怖がるから	1
子どもの頃に怖い経験をしたから	1
知らなくても生きていけるから	1
今と価値観が異なるから	1
どのように話してよいかわからないから	1
無回答	12

⑥～⑨の結果は、昔話についての保護者の認識である。これによれば、自分の子どもに昔話をする保護者は2～3割程度で、あまりしない・まったくしないという保護者は7～8割いた。また、約半数の保護者は、自分の子どもは保育者から昔話を聞かされていると思っており、昔話は子どもの育ちに必要だと考える保護者も8割いた。その一方で、昔話に対する戸惑いもあるようだ。すなわち、保護者が自分から積極的に昔話をしないのは、昔話のもつ残酷性、恐怖感が親自身の体験からきていることも、理由の一部にあった。

4. 考察

以上の結果から、子どもを取り巻く「おはなし」環境を保育と家庭の場に関わる保育者と保護者の認識から考察してみたい。

1) 保育現場における「おはなし」環境

一日の保育の中で、保育所と幼稚園では「おはなし」を取り上げる時間帯に違いが見られたが、それは生活上の流れの中で子どもに「静」の時間にふさわしい時間が異なることを意味する。保育所では昼食前後の時間、幼稚園では登園後と降園前の集まる時間であるが、そうすると「おはなし」を取り上げるねらいも異なってくる。つまり、保育所では午前の活動後と食後の「静」の時間として子どもを落ち着かせるねらいが第一に考えられる。一方、幼稚園では、午前の主活動前に実施される場合は、活動の導入として行うことが第一に考えられる。また、降園前には一日を「静」の時間で終わらせるという効果をねらっていると考えられる。どちらにしても、「おはなし」をする時間は一日の中に組み込まれている。

その一方で、「おはなし」の手段を選択する理由として「指導計画に組み込まれているから」という理由が1割しかないことは、実際は

「おはなし」の内容そのものは計画されていない場合が多いと推測される。回答を総合的に解釈すると、どのような手段でどの分野の「おはなし」を選択するかは、保育者個人の趣向に委ねられているといえよう。本来、保育は計画されるべきものであるが、この分野において具体的立案はされていないのである。つまり、ディリープログラムとしておはなしの時間が用意されていても、何を行うかは保育者に任されていることになる。

そこで、幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂時に強調された領域「言葉」の内容の一項目である『絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、創造する楽しさを味わう』ことのためには、計画的な「おはなし」の指導計画を具体的に立案することが求められる。年間を通して、子どもの言葉を豊かに育む「おはなし」を季節的なもの、活動に有意なもの等の側面から、学年ごとに計画することが保育を受ける側の経験の偏りをなくすことになると思われる。

また、『視覚に頼らず、自分の心の中に自由にイメージを膨らませていくことができるよう、語りや読み聞かせを取り入れることが大切』という解説からは、視聴覚教材だけに頼る「おはなし」だけではなく、計画的に素話を実施する必要がある。保育者は、素話による子どもへの効果と魅力は十分に理解しているので、それを確実に実施できるような技術習得や、養成段階での経験が必要だと考えられる。保育者養成のカリキュラムにおいて、それに関する基準はないため、授業内容は担当教員に任されているのが現状である。つまり、絵本や紙芝居、素話などの読み聞かせ活動についての指導は、養成校によって違いがあると思われる。

今後の課題として、保育者として身につけておいたほうがよい技術については、ある基準のもとその習得を義務付ける必要があるだろう。さもなければ、「おはなし」は保育者個人の趣向によって実施される現実回避できず、習得や実践において準備を必要とする素話はますます敬遠されていくことになると思

われる。

2) 家庭における「おはなし」環境

本調査の対象となった家庭においては、ほとんどの自宅に絵本を備え、回数に差はあるにしても保護者が絵本を子どもに読み聞かせる時間をとるなど子どもにとって「おはなし」に関する物的環境は十分に整えられているといえる。

また、素話がなされているかは昔話の実施状況に置き換えて明らかにしてみたが、家庭ではほとんど行われていないという結果であった。この傾向は、さまざまな映像媒体が存在する現代、ますます強まることが考えられる。さらに、昔話は家庭よりも幼稚園で触れていると思っている保護者が半数近くいる一方で、園側では、昔話の分野の実施率は非常に低かった。このことから、子どもにとって、昔話に触れる機会は決して多くはないことがわかった。保育の現場で意図的に語らなければ、減少の一途にあるといっても過言ではないだろう。今や家庭における語りの文化の継承は、間違いなく衰退しているのが現実である。

実際に、保護者自身が自分の幼少期に昔話を語られる経験がすでに少なく、子どもにどう与えてよいのかわからないといった意見も目立った。昔話を子どもの育ちにとって有益であると解釈するよりも、その残虐性・非常性から有害であると気にかける親も居る。回答者の98%が母親であることも影響しているだろうが、自ら積極的に語りたくないという傾向も窺えた。

しかし、石井桃子⁴⁾や小澤俊夫⁵⁾は、各著書の中で、子どもが話を聞いて想像する行為は、これまでの経験の中からつくられるもので、見たことがないことはイメージし難く、それよりも全体のストーリーから得るもののほうが大きいと昔話の現代的意義を強調している。確かに、子どもは語りの中で理解し、理解しがたいことは感性によって、なんとなく怖かったというようなことを感覚で理解するのであろう。明らかに、TVやDVDなどの映像のほうが残酷かつ暴力的である場合が多く、自然

に目にふれてしまうことのほうが有害かもしれない。

さらに、大切なことは、信頼のおける大人が語ることであるという。子どもにとって信頼できる大人が語って聞かせることと、見ず知らずの大人が語るのとは子どもの受け止めは大きく異なる。その意味で、家庭で親や家族が子どもに習慣的に語る「おはなし」は、言葉や感性を豊かに育むこと以上に、深い意義があると考えられる。

5. おわりに

子どもを取り巻く「おはなし」環境について、保育現場と家庭の環境からその現状と課題を明らかにしてきた。保育現場においては、保育所と幼稚園とは実施状況に異なる面があったが、双方ともに「おはなし」は保育者自身の趣向に影響され、指導計画の中に織り込んだ計画的実施ではないことが懸念された。

一方、家庭においては、物理的には恵まれた環境にある子どもが多く、保護者も絵本の読み聞かせを積極的に実施していることがわかった。

保育現場と家庭の双方においては、昔話などを語る文化は伝承されにくくなっていることも明らかになった。今回の保護者への調査は、私立幼稚園の保護者が対象であったため、今後は共働きの保護者を対象とした調査も必要となろう。比較的、子どもと家庭で過ごす時間が多い幼稚園の家庭であっても、語りの機会はほとんどなくなっている。視覚的に手に取りやすい絵本による「おはなし」は今後も変わりなく保育現場でも家庭でも積極的に支持されていくことであろうが、昔話を素話によって語る手段は今後ますます危ぶまれる。

この点を踏まえると、保育現場においては保育者の「おはなし」に関する技術習得と計画的実践が、また家庭においては、保護者に対する「おはなし」に関する啓蒙活動を積極的に推進していくことが望まれる。

【注】

- 1) 駒沢女子短期大学研究紀要43号、2010年3月。
- 2) 「おはなし」の表記について、筆者は平仮名表記としている。「お話」は、日常的に保育者が

子どもに話をすることも含んでおり、本研究においては、ストーリー性のある話を意図的に行う一つの教育的活動として区別したために、固有名詞的に平仮名表記とした。今後、この活動の意義を専門的に確立していく上で、この表記が使用されることを望みたい。

- 3) 厚生労働省発行「保育所保育指針解説書」, 平成 20 年 3 月.
- 4) 石井桃子「幼児と教育」62 - (3) 幼児とおはなし ,pp.27-31.
- 5) 小澤俊夫「改訂 昔話とは何か」小澤昔ばなし研究所、2009 年.

【参考文献】

- ・松岡享子「お話とは」東京子ども図書館, 2009.
- ・重信幸彦「お話と家庭の近代」久山社, 2003.

謝辞

本研究にあたり、質問紙にご協力いただきました保育所・幼稚園の関係者各位、及び付属こまざわ幼稚園の保護者各位に厚くお礼申し上げます。